

# 日本語の俗語と英語の俗語

茅本百合子・町 博光

## Contrastive Study of Japanese Slang and American Slang

Yuriko KAYAMOTO, Hiromitsu MACHI

キーワード：俗語、スラング、日本語、英語、対照

### 1 はじめに

本研究は、日本語の俗語と英語の俗語（スラング）の対照を試みるものである。スラングはどういう機能を有するのか、造語の特徴は、またスラングの表現効果などの点について考察していく。ここでは、アメリカのスラングを主体とするが、それらの使われ方、意味特徴は、イギリスやその他の英語社会のスラングとは異なることがある。英語のスラングは、『現代スラング英和辞典』に基づき、また、日本語の俗語は「俗語一覧表」\*に基づいて考察を行う。

#### \* 「俗語一覧表」

(1993年度の「日本語位相論演習」で演習参加者が分担作成したものである。『日本語大辞典』(1989：講談社)、および、『新明解国語辞典 第四版』(1992：三省堂)の「俗語」表記のあるものを中心とし、これにテレビやラジオなどの日常会話から若干を補って作成した。約1400語を採録している)

### 2 スラングの定義

多くのスラングらしい (slangish) 語は、生まれたり、消えたりして流動的である。それを使う地方、世代、社会階級によっても違う意味を含む。スラングを定義するのは難しい。アメリカの大学の言語学入門の教科書には、「ほとんどだれでもときおりスラングを使うことがあるのだが、この語を定義するのは容易ではない」と記してある (Fromkin & Rodman, 1993; 300)。Dictionary of American Slangの著者は、アメリカのスラングをこう定義する。「普通の米国人が相当な割合で実際に頻繁に使っているか、もしくは知っている単語と表現でありながら、大部分の人には正しい、よい使い方とされていないものである。……スラングの最良の定義は……それを使う人、そしてそれが伝える雰囲気、含みによって決ま

るのである (Wentworth, 1960; 3)。定義はまだ続くが、著者はスラングに好意的である。

たとえば、「アメリカンスラングは端的で使いやすい、きわめて具体性に富んでいる」(p.4)、「標準語よりも速やかに、容易に理解され、しかも親近感を感じさせる」(p.8)、「スラングは説得力があり、生き生きとして印象的である」(p.8)、「簡潔であるからこそパンチが効く」(p.9)のような特徴を挙げる。スラングは多くの人に使われているが、やはり、スラングを使って誉められるものでもないようである。

以下は、実際にあった小さな出来事であるが、筆者の一人がある教会のボランティアの英会話教室をのぞくと、20歳ぐらいのアメリカ人宣教師が、「授業をさぼる」とか「教室を抜け出す」の意味で、sluffという単語を黒板に書いて教えている。「Is that a slang?」と問うと、その宣教師は怒って「No, it's not a slang.」と答えた。その宣教師があまりにも真剣だったので、「スラング」とは彼にとって「良くない言葉」なのだろうかと思ったことがある。手元の英和辞典 (リーダーズ英和辞典；1986：研究社)では、sluffはsloughのことで、「抜け殻」や「かさぶた」の意味の他に、(俗)のマークがついて「ずらかる」という意味がある。ここでの発見は、「スラング」の定義は人によって違うということと、スラングを使っていると指摘されることを恥じているということだった。彼にとって、「スラング」は良くない言葉であろうが、彼は仲間の宣教師たちとはスラングを使って楽しそうに話しているのである。日本語の「俗語」も同じことであろう。それらは、日常の話し言葉として根を張っているものようである。

アメリカのスラングとは、どのようなもので、日本語の俗語とどのように違い、また、どのように似ているのであろうか。筆者たちが収集して考察を加えている日本語の俗語も、アメリカのスラングと同様、その定義は難しいし、事実、辞書による俗語の認定の揺れも発見している。そのような状況の中で、

俗語（スラング）とは何であるかを検討する。

### 3 スラングの誕生とその行方

アメリカのスラングのほとんどは、元々、あるグループで使われていた言葉が一般に広まり、定着したものである (Wentworth, 1960; 4)。スラングもすべての言葉と同様に、時代の流れによって、一定時期、大いに流行ったり、また、廃れて使われなくなったりする。かつて、スラングとされていた語でも、たとえば、jazz、A-bomb (Wentworth, 1960; 7)、freshman、mob (Fromkin et al., 1993; 276)などは、今では、標準的に用いられている。元は、あるグループの専門用語だった語が、全国的に広まるには、アメリカ社会では、テレビ、ラジオ、映画、新聞などのマスコミに頼ることが大きな条件である (Wentworth, 1960; 7)。それは、日本社会にも同じことが言える。しかし、マスコミの繁栄以前でもスラングが広がっていたのは、国民の移動性の高いアメリカ社会ならではであろう。加えて、アメリカ社会では、移民が自分たちの言葉で生活している。職業的グループや民族的グループが、グループ内だけでわかる言葉を使い、それが人の移動で他のグループに知れることになり、ついには全国へと広まることもあった。日本でも朝鮮語からの「チョンガー」(未婚男性の俗称、【新明解国語辞典 第4版 (1989)】)、中国語からの「ロートル」(この語は【新明解国語辞典 第4版 (1989)】に俗語の認定はない) などといった言葉が使われているが、アメリカ社会の比ではない。

スラングは、あるグループが使っ言葉が広まるのであるが、Wentworthらは、アメリカのスラング辞典を作りながら、スラングのほとんどが男性によって作られ、使用されていることを痛感している (1960; 11)。これは、彼らがスラングを収集していた時期 (1940s - 1950s) に起因すると思われる。この時代に「グループ」を作っていたのは、ほとんど男性で、Wentworthらも、この時代の女性によるグループは、スチュワーデス、美容師、コーラスガール、看護婦、売春婦、ウェートレスなどしかいなかったと指摘している (1960; 11)。女性の大半は専業主婦として家庭の中に閉じ込められており、たとえ、近所の主婦で集まって話をして新しい言葉を作っていたとしても、広く知れ渡ることにはなかったと思われる。一方、女房言葉などの例外的なものを除いて、日本の俗語も同じような男性主体の状況が見られた。しかし、現代では、造

語主としての女子学生の役割が大きく喧伝されるようになってきている。

### 4 スラングの形態的特徴

スラングは、以下のように、新語ができる場合と同じような過程で発生する (Flexner, 1960; 17)。

- 1) 従来の語や語の部分を使って、新しい組み合わせを作ったり、隠語や頭字語を作ったりする。
- 2) 従来の意味、品詞を変える。
- 3) 発音を変える。

他にも、外国語から借りる、擬音・擬態語のように、新しく単語を生成する場合も考えられる。そして、これらの「新語」は一般的に話し言葉から作られる (Flexner, 1960; 17-18)。

スラングの全般的な形態的特徴としては、まず、短い、特に単音節語が多いということが挙げられる (Wentworth, 1960; 9)。そして、破裂音、または、帯気音で始まることが多い (Wentworth, 1960; 9)。一方、日本語の俗語は、特別短い言葉ばかりではなかったが、語頭音がタ行、ハ行、カ行、サ行に多く、「俗語一覧表」の俗語の69%を占める (町, 2000)。また、特殊音の促音、撥音、拗音も頻繁に観察された (町, 2000)。日本語も英語も俗語としてこれらの音の持つ軽快さ、生きのよさは好まれるようである。さらに、ラテン語から派生した言葉、たとえば、vagina、penis、defecatesなどは「科学的」で「クリーン」な響きがあり、アングロサクソン起源の同義の言葉、cunt、prick、cock、shitなどは、タブー視されるという指摘 (Fromkin et al., 1993; 304) は、日本語の俗語は和語が多いという事実 (町, 1999) と似ている。

スラングの形態的特徴を、もう少し細かく見ていくことにする。スラングの作り方で頻繁に行われているのが、1) の今までであった語を変化させて作る方法である。変化の方法は、語を伸ばすことと、語を短くすることが行われる。語を伸ばす手段としては、複合、接辞の付加、混成があり、語を短縮する手段としては、下略 (逆成)、上略、上下略、頭字語などがある。2) の既成の語の意味を変化させてスラングとする方法もよく使われる。これには、一般化 (小大と連鎖)、特殊化、比喻、格上げと格下げなどがある。3) の発音では、アクセントを変える、訛った発音を使う、挿入辞を入れる (時として綴りも変わるこ

がある) などがある (Flexner, 1960; 19-24)。以下に、Flexner の説明を簡単に紹介し、日本語の俗語にも当てはまるかどうか検討する。

## 1) 語の形態を変化させて俗語を作る方法

### 複合語

既成の2語を組み合わせて新語を作る。組み合わせは、標準語とスラングを折り混ぜて構わない。できた語も場面によって、標準語となったり、スラングになったりする。たとえば、playboy、kickoff、baby-sit、hot-shot などである (p.19)。複合語は、よく定着するまで、ハイフンが用いられる。日本語の場合も、俗語に複合語は多い。たとえば、「こしぎんちゃく」、「すべりどめ」、「はげちゃびん」などである (「俗語一覧表」より)。

### 接辞

接頭辞、接尾辞をつけることによって成る語を派生語という。標準語と同様に、スラングも接辞をつけて容易に新語を形成する。これらの接辞のほとんどは交替可能で、意味も推測しやすい (Flexner, 1960; 20)。主な接辞は、re-、de-、-ed、-er、-ize などである。一方、スラングに高頻度の接辞も存在する。-crazy、-itis、-jockey などである。日本の俗語では、俗語らしい接辞は、その単語が俗語であると認定される重要な要素である。主な接辞として、「すつ〜」、「とつ〜」、「ぶつ〜」、「〜ちい」、「〜ちい」、「〜ちよ」などがある (町、2000)。

### 混成語 (混交)

2語をつなぎあわせる方法だが、ふつう、前の語の前半部分と後ろの語の後半部分をつなぐ。標準語として定着しているものでは、motel (motor + hotel)、smog (smoke + fog) が有名である。しかし、スラングでは混成語は稀である (Flexner, 1960; 21)。日本語では、2語を組み合わせる際、各語の後半部分を省略する場合が多い。たとえば、「アル中」、「たなぼた」、「うなどん」などである (「俗語一覧表」より)。

### 下略法

多音節語の第1、または第2音節まで残して、後は省略してしまう方法である。学生が多く用いる。cig (arette)、homo (sexual)、hood (lum)、lube (=lubrication)、mike (=microphone) などがある (Flexner, 1960; 21)。この方法は作成が簡単で、現在でも数多くの下略語が使われている。日本語では、「たてかん」、「アナ」、「アマ」などがある (「俗語一覧表」より)。

## 逆成法

一種の下略で、名詞の-er、-or、-arなどの語尾を取って、動詞を作ることである。そのような形の動詞は存在しないのに、誤った類推からそれらの語尾を取り、結果的に、新しい語を作ることになる (Flexner, 1960; 22)。日本語では動詞を作るのに「する」を付加するが、口語的な表現で、名詞に「る」を付加することもある (たとえば、「ぐず」、「ぐち」を動詞化して、それぞれ「ぐずる」、「ぐちる」など)。

### 上略法

語の前部の音節を省略する。bebop → bop、recruit → croot、confess → fessなどがその例である。上略語は下略語より少ないが、元の形が推察しにくいいため、粋な言葉と思われる (Flexner, 1960; 22)。日本語ではわさびのことを「さび」と言ったりする。

### 上下略語

数は少ないが、語の始めと終わりを略したスラングも見つけられる。たとえば、distillery → still「蒸留器」、alligator → gate「ジャズ狂」、detective → tec「刑事」などである (Flexner, 1960; 22)。日本語の俗語では、ほとんど見られない。

### 省略語と頭字語

BS (bull shit)、p.o. (pissed off)、s.o.l. (shit out of luck)などがこの例である。このタイプの省略語は、婉曲表現であることが多い (Flexner, 1960; 23)。現在、日本では、テレビで「BS」ということばをよく放送しているが、日本に滞在している英語話者は、この語を聞くとあまりいい気がしないということである。また、省略語を1語として読む頭字語の例としては、awol (absent without leave「無断欠勤中」) などがある。日本語には、「かまぼこはとと(魚)か」ととぼけたことを聞く「かまとと」の例や、「変態」をローマ字で「hentai」と書き、その頭文字H(エッチ)で「変態」のことを表すようになった例がある。

## 2) 語の意味を変化させて俗語を作る方法

### 一般化

ある語が1つ以上の意味をもつようになることで、拡大と連鎖がある。

**拡大** 従来の意味に関係のある意味を派生させること。スラングの例として、bird「女の子」「ヘリコプター」、hot「わくわくさせる」などがある。日本語の俗語の例としては、「パンク」(出産のこと)、「売れ残り」、「二号」などがある。

**連鎖** 元の意味から次々に連想されて派生した

意味で、新しい意味は、元の意味と直接関係がなくなっている。スラングの例として、zombie「ウードゥー教の蛇神」から「死体に入ってこれを生き返らせる霊力」または「その生き返った人」、転じて「変人」。pineapple「爆弾」、blues「憂鬱な」から「ブルース」などがある。日本語の俗語では、「おしゃか」、「くび」、「ほし」などがある。

#### 特殊化

ある語もっているさまざまな意味が失われていき、狭い意味だけで用いられること。一般化より少ない (Flexner, 1960; 18)。スラングでは、gay (男性同性愛者の)、moll (ギャングの情婦) などがある。日本語の俗語では、「ヤンキー」という言葉 (他国人がアメリカ人を指す言葉から、日本の町中に見られる不良少年を指す言葉に変化した) がある。

#### 比喩

一般化や特殊化によるスラングの生成は、そのほとんどが比喩によるものである (Flexner, 1960; 19)。日本語の俗語も、比喩によるものが多い (町, 1999)。たとえば、「上玉」、「ピヤ樽」、「ねずみ取り」などである (俗語一覧表より)。

#### 格上げと格下げ

意味が変化していく過程で、新しい意味の品位が上がったり下がったりすることがある。スラングでは、格下げの方が多くである (Flexner, 1960; 19)。日本語の俗語も意味の格上げ、格下げの両方が見られるが、格下げが多い (町, 1999) のは、日米同様である。

### 3) 音の変化とその他の要因によって作られる方法 発音の変化

**アクセント** スラングと意識して発話する場合、元の語とは違うように発音したり、強いアクセントをおいたり、リズムを変えたりする。

**訛りと転化** わざと訛ったように発音して標準語ではないような感じを出す (Flexner, 1960; 25)。日本語では語彙としては、サケ-シヤケ、さくる-しゃくる、などの音韻交替が見られるほか、今ひとついまいち、後見-うしろみ、などの漢字の読み方による変化もある (後ろの語が俗語らしい言い方)。なお、俗語らしい発音の変化としては、特殊音化や特殊音の添加がある (町, 2000)。たとえば、「ひろば-ひろっぱ」、「けりとばす-けつとばす」、「とがる-とんがる」、「うちなげる-ぶんなげる」、「〜てしま-〜ちゃう」などである。

#### 借用語

英語も他の言語にもれず、外国語から新語が生まれる。これら外来語は、大抵の場合、その発音、綴りが英語風に変えられる (Flexner, 1960; 26)。日本語の場合も、多くの外来語が使われ、その一部は俗語としても使われている。たとえば、「オンリー」、「サボる」、「ダブる」などである。

#### 擬音語

自然にある音をまねた名詞で、その音を出すもの、またはその音自体を指す。たとえば、buss はミツバチの羽音だが、スラングとしては、電話の音、そして、電話をかけるという意味にも使われる。bangは、「銃」「銃声」「あっさり死んじまえ」、clinkは、「チャリンという音」「乾杯」という意味にもなる (Flexner, 1960; 29)。日本語の俗語では、反復した擬音語が用いられることが多い (町, 2000)。

#### 重複形

多くの重複形は擬音語で、強調のため反復させる場合がある。多くの重複形は、賛成、喜び、意気揚々の気持ちなどを表す。反復の仕方は以下の3種類である (Flexner, 1960; 30)。

- a) 同じ要素を繰り返す。chop-chop(食べる)、she-she(彼女)、yum-yum(おいしい) など。日本語では、「どっこいどっこい」、「なあなあ」、「けちよんけちよん」、「じゃらじゃら」などがある。
- b) 2回目の反復で頭の子音が変わる。wやdになることが多い。okey-dokey(合点)、nasty-wasty(悪い)。日本語の俗語では、「ぺちやくちゃ」、「じゃかすか」などがある。
- c) 後部の反復で母音が変わる。たいていiが、aかoになる。ding-dong(鐘の音)、flim-flam(いかさま) などである。これらの他に、書き言葉から始まった暗号的スラングである逆読みスラングがある。boneを逆さに綴ってenob(ペニス)、boyを逆さに綴ってyob(ガキ) という具合である。しかし、このような語がスラングとして定着したものは少ない (Flexner, 1960; 32)。日本語では、「さがす」を逆さに読んで、「ガサ」、「ガサ入れ」などと言うことがある。

## 5 スラングの意味特徴

スラングはその発生の性格上、その使用により、自分がそのグループの一員であることを確認させ、仲間意識を強める働きをする (Flexner, 1960; 10)。

したがって、グループ以外の人、あるいは事について、スラングを用いるときは、「侮蔑的スラング」が多くなり、自然に「恐怖、不信、嫌悪」を表現するスラングが増えることになる(Flexner, 1960; 10)。「俗語一覧表」の俗語にも、マイナスイメージのものが多かったが、Wentworthも「スラングは誉めるより蔑むほうが多い」(Flexner, 1960; 10)と述懐している。彼らの印象としては、「反モラル性、無礼さ、非標準性」をもつスラングだが、やはり、生活に密着した言葉だけあって、触覚と味覚からの比喻が多く使われている(Flexner, 1960; 12)。たとえば、食べ物を表す標準語がスラングになると、金銭、体の部分、日常の人間関係、酔っぱらい、でたらめ、性的なことを表すようになる(Flexner, 1960; 12)。なお、スラング全体の中で、性的なものは比較的少ないが、使用頻度は高い。そして、多くの性に関する語は言いにくいものなので、タブー視され、スラングと見なされることがある(Flexner, 1960; 13)。

性的、侮蔑的なスラングと関連があるのは、罵倒語である。罵倒語はインパクトが強く、それを相手に浴びせかけて、相手を侮辱したり、ののしったりする言葉である。しかし、スラングと罵倒語はぴったり重なる集合体ではない。さらに、今回、「俗語一覧表」を作成するとき、差別用語や卑語は除いている。しかし、多くの場合、俗語、スラングと罵倒語の間には厳格なラインが引かれない。

英語母語話者のパッシンが、英語と日本語の罵倒語を比較している(パッシン; 1989)。まず、宗教関係の罵倒語であるが、英語では、神を冒とくする言葉が、相手を侮辱する言葉として用いられている。ただし、少し前から、宗教的な罵倒語は廃れがちで、その代わりに排泄物や性的な言葉が増えつつある(Flexner, 1960; 27)。性的な言葉を罵倒語として使うのは英語では元々例が多い(パッシン, 1989; 105)。そして、身体部分、主に生殖器の語を使うものの頻度が高い。しかし、以上あげた罵倒語の種類は、日本語には少ない。日本語は罵倒語は少ないと言われているが、あえて、どんな言葉を罵倒語として使っているかという点、排泄行為に関するもの(「クソ!」、 「クソ〜」など)や、愚かさ関係の語(「バカ」、「アホ」など)、そして、動物関係の語(「ちくしょう」、「ブタ」など)である(パッシン, 1989; 114)。もちろん、英語では以上のものに関する罵倒語も豊富である。

これらの罵倒語は一般社会では、ふつう、タブー

語とされ、口に出すのははばかられる言葉である。故に、相手を侮辱するのに強いインパクトが期待できる。英語のタブー語には、上記の神を冒とくする語、性交や性器に関する語のほかに、人種問題からんだ語もある(Fromkin et al., 1993; 303)。これらタブー語を避けるために婉曲表現が使われるが、Flexnerは婉曲表現は標準語に多いとする(1960; 27)。しかし、スラングにも婉曲的な表現がないわけではないとつけ加えている。

## 6 終わりに

以上、英語のスラングを日本語の俗語と比較して見てきたが、作られ方や、使われ方、その働きはたいへんよく似ていた。言葉はどんどん廃れ、消えていき、また、その何倍もの新語が生まれている。スラングの広がり方は、昔は移動性の高いアメリカ国民や、移民が、現代ではマスメディアがそれを担っている。日本のマスメディアも俗語や流行語を日本各地に運んでいる。使われ方は、アメリカのスラング、日本の俗語とも、生活に密着しているが、どちらかと言えば、マイナスイメージになるものが多く、親しみを込めるがゆえに、ぞんざいな感じを受ける可能性があった。言葉の形態的特徴としては、英語、日本語とも、破裂音のようなインパクトの強い音が、多く使われているようであった。

スラングはアメリカ人の日常生活になくはならないものである。多くの人は無意識のうちにスラングを使い、コミュニケーションを生き生きとしたものにしていく。最近では、スラングと標準語の差が広がりつつあるという。標準語を「公的」で「書き言葉風」だとしたら、スラングは「私的」で「話し言葉風」であると言える。この2つの言葉の差が広がれば、標準語を習った外国人は実際のアメリカ人の話し言葉が理解できない可能性が出てくる。「私的」で「話し言葉」といえば、方言との関連も問題になってくる。アメリカのスラングだけでなく、日本の俗語も各地の方言と関係があるようである。そのため、俗語と方言の線引きも難しい。スラングの核心に近づくと、あらゆる角度からスラングに迫っていくのが今後の課題である。

## 引用文献

Flexner, S. B. 1960 「アメリカンスラングの背景と

- 構成」ゴリス,R.C.、大久保雪美訳編 1986『現代スラング英和辞典』東京：秀文インターナショナルpp.17-34.(Wentworth, H. & Flexner, S.B. 1960 Dictionary of American Slang.)
- Fromkin, V. & Rodman, R. 1993 An Introduction to Language. Fifth edition. New York: Harcourt Brace Jovanovich Clooeger Publishers. (『言語とは何か...現代英語学への招待』梅 田巖、石井丈夫、北條和明、竹村憲一訳 京都：あぼろん社 1980)
- ゴリス,R.C.、大久保雪美訳編 1986『現代スラング英和辞典』東京：秀文インターナショナル (Wentworth, H. & Flexner, S.B. 1960 Dictionary of American Slang.)
- 町 博光 1999「日本語俗語の意味特徴」『木坂基先生退官記念論文集 日本語表現法論攷』溪水社
- 町 博光 2000 「日本語俗語の音声的特徴」『国文学攷』165.1-11.
- パッシン、ハーバード 1980『英語化する日本社会』サイマル出版社 徳岡孝夫訳
- Wentworth, H. & Flexner, S.B. 1960「原著者前書き」ゴリス,R.C.、大久保雪美訳編 1986『現代スラング英和辞典』東京：秀文インターナショナル (Wentworth, H. & Flexner, S.B. 1960 Dictionary of American Slang.)